Medical Library 書評・新刊案内

本紙紹介の書籍に関するお問い合わせは，医学書院販売・PR部（03-3817-5650）まで
なお，ご注文は最寄りの医学書院特約店ほか医書取扱店へ

子どもの「痛み」がわかる本
はじめて学ぶ慢性痛診療

加藤 実●著

A5・頁160
定価：3,850円（本体3,500円＋税10%）　医学書院
ISBN978-4-260-05008-1

評者　倉澤 茂樹
福島医大教授・作業療法学

感覚過敏や鈍麻など，臨床を通じ肌身でとらえた子どもの感覚世界を，子どもの代弁者となり保護者や多職種に伝えることの重要性を実感している。本書を読み終え，著者である加藤実先生に勝手ながら妙な親近感を覚えた。長年にわたり子どもたちの痛みと向き合ってきた臨床家としての経験知，そしてエビデンスを重視する研究者としての姿勢に共感したのである。

子どもの痛み体験は，身体的反応だけでなく，不安や恐怖など情動体験として認知形成され，長期的な影響も引き起こす。この事実はわが国の児童・思春期医療において十分に認識されていない。処置時の痛みは「一瞬だから」と軽視され，「そのうち慣れる」と放置されることも少なくない。リハビリテーションに携わるセラピストも例外ではない。新生児集中治療室ではカテーテルやモニター機器が装着され，臓器発達の未熟な新生児は動くことにさえ苦痛を伴うだろう。術後早期から開始されるリハビリテーションにおいて“機能回復”を優先するあまり，痛みを蔑ろにしていないだろうか？　エビデンスとともに示される事実によって，われわれセラピストは内省する機会を得るだろう。

児童・思春期の医療・教育に携わる人へ

本書は，臨床現場における子どもの痛みの予防，痛みに苦しむ子どもと保護者への対応に寄与することを意図して構成されている。

第Ⅰ章「子どもの『痛み』を理解する」では，痛みの定義，メカニズム，そして痛みに伴うさまざまな影響について，専門的知識を有さない読者にも伝わりやすいようわかりやすく説明されている。慢性痛への対応には，保護者をはじめとして子どもの生活を支えている周囲の人々の協力が重要となる。支援者の正しい理解と適切な対処方法を引き出すために，家族・心理教育（あるいは疾病教育）が有効とされており，本章にはそのヒントが詰められている。

第Ⅱ章「子どもの『痛み』を診る」では，見逃されやすく言語化されにくい子どもの慢性痛をどう評価するかについて，臨床実践と研究に裏付けられた5つのポイントが，具体例とともに示されている。そして，そのアプローチ方法についてWHOによるガイドラインを引用しながら，身体的要因への対応，心理・社会的要因への対応，薬物療法が解説されている。本章に登場する10の症例は，慢性痛を引き起こす各疾患の理解を促すだけでなく，診療を進めるための道筋を示している。症例ごとに記載されている“診察者の頭の中を覗く”では，いかに子どもの症状をとらえ，類推し，診断・治療へと導くか，が述べられ，読者は関心を持って読みすすめるに違いない。さらに症例報告にはさまざまなノウハウが凝縮されている。例えば，図を用いて子どもに痛みの原因を説明する方法は，子どもの不安を取り除くだけでなく，治療へのコンプライアンスを確保するために効果的な工夫と言えよう。

慢性痛は，国際疾病分類　第11版（ICD-11）において初めて疾病として位置付けられた。今後，慢性痛と診断・治療される子どもが増えることが予想される。著者が強調するように子どもの慢性痛の要因は複雑に絡み合っていることが多く，中・重度の場合は理学・作業療法士を含めた集学的アプローチが必要となる。本書はその先駆けであり，優れた入門書である。

病院内における患者協働の実装に向けて
第26回日本病院総合診療医学会の話題より

第26回日本病院総合診療医学会学術総会（会長＝獨協医大・志水太郎氏）が2月18～19日，「Diagnostic Excellence――総合診療，これからの診断学」をテーマに，ライトキューブ宇都宮（宇都宮市）の会場およびオンライン配信によるハイブリッド形式にて開催された。本紙では，シンポジウム「病院における患者協働の推進：AHRQ患者協働ガイドを実装できるか？」（座長＝練馬光が丘病院・小坂鎮太郎氏，名大・栗原健氏）の模様を報告する。

●大会長講演を行う志水太郎氏

◆日常臨床とリンクさせながら患者協働の概念の普及をめざす

医療の高度化・複雑化が進む中，ケアにかかわる関係者に患者や家族を巻き込む患者協働（Patient Engagement）が患者安全対策として重要視されてきていると話したのは栗原氏。病院内での患者協働の推進によって，投薬エラーや転倒の減少といった医療の質・患者安全の向上，病院の財務状況の改善，米国の医療研究品質機構（AHRQ）が中心となり開発された患者経験（Patient Experience）尺度であるCAHPS®の向上など，さまざまな項目での効果が期待されている。

実践に当たっては患者協働を実装していくための戦略が必要だ。参考にすべき資料として氏が挙げたのは，AHRQが策定する指針“Guide to Patient and Family Engagement in Hospital Quality and Safety”（https://bit.ly/3ElWdHv）である。①患者・家族にアドバイザーとして協働してもらうこと，②質改善を目的としたコミュニケーションを行うこと，③看護師の引き継ぎ業務をベッドサイドで行うこと，④IDEAL（Include, Discuss, Educate, Assess, Listen）を用いて要点を押さえた退院計画を作成することの4つの戦略を以て，病院での患者協働の実装をめざす。同指針は，現在翻訳作業が進行中であり，近く一般に公開される見込み。栗原氏は「患者協働を意識していなくともコミュニケーションの重要性を普段から意識している医療従事者は多いはず。日常臨床とリンクさせながら患者協働の概念の普及をめざしたい」との考えを示した。

続けて，市中病院の立場から安本有佑氏（板橋中央総合病院），医療施設認定合同機構（JCI）からの認証を得た大学病院の立場から宮上泰樹氏（順大），総合診療科外来の立場から冨山周作氏（獨協医大）が，それぞれ自施設で実践する患者協働の取り組みの紹介および導入方法の提案を行った。討論の最後には座長の小坂氏が「本学術総会のテーマであるDiagnostic Excellenceの実現には患者協働が不可欠になっていくだろう。まずは患者・家族を医療のパートナーに加えるところから始めていただきたい」と，患者協働の実践を参加者たちに呼びかけた。

●シンポジウムの様子

医学書院ウェブサイトで何ができるの？
医学界新聞閲覧
学会情報check
書籍立ち読み

誰も教えてくれなかった、
子どもならではの「痛み」の診かた・考えかた
医学書院

子どもの「痛み」がわかる本
はじめて学ぶ慢性痛診療
加藤 実

集学的痛みセンターで慢性痛診療に取り組む著者が伝える、子どもならではの「痛み」の診かた・考えかた。同じ「痛み」でも急性痛と慢性痛のメカニズムのちがいを、診療のコツや豊富な症例を交えながらわかりやすく解説。付録に日常臨床の疑問に答えるQ&A付き。

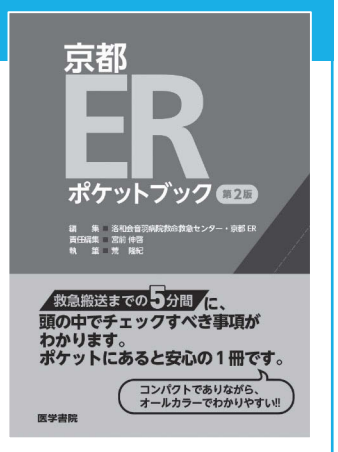
目次
Ⅰ．子どもの「痛み」を理解する
なぜ「痛み」を感じるのか／子どもは大人より「痛み」を感じやすい？／強い「痛み」の体験はその時だけでは終わらない？―痛み予防の意義／ワクチン注射時の痛みの軽減法―笑顔につながる子どもの痛み予防
Ⅱ．子どもの「痛み」を診る
痛みを尋ねる際に知っておきたい5つのポイント／急性痛と慢性痛の見きわめ方―その原因，随伴症状と特徴／慢性痛を評価する／慢性痛に対するアプローチ／代表的な痛みの部位と慢性痛をきたす疾患／症例紹介／集学的アプローチによる痛み治療
付録　Q&A

書籍の詳細はこちらから

●A5　2023年　頁160　定価：3,850円（本体3,500円＋税10%）［ISBN978-4-260-05008-1］

救急診療のバイブルとして、
ぜひ白衣のポケットに！
医学書院

◆ER研修の壁を乗り越えるサポーターとして、上級医の頭の中を言語化してコンパクトにまとめました。
◆第2版では皆が躓くERでのポイントを意識した改訂。
◆主訴別アプローチの「アタマの中」は文字＋イラストやフローで図示し、緊急性の高い病態対応の大きな幹をイメージ化。
◆コンパクトでありながらオールカラーでわかりやすい！



京都ER ポケットブック 第2版

編集：洛和会音羽病院救命救急センター・京都ER
責任編集：宮前 伸啓　執筆：荒 隆紀

目次
Ⅰ 原則編
Ⅱ 検査編
Ⅲ トリアージで考える主訴別アプローチ編
Ⅳ 治療編
Ⅴ 特殊分野編
Ⅵ 使える！ERの覚え書き

◆A6　頁528　2023年
定価：4,180円（本体3,800円＋税10%）
［ISBN978-4-260-04988-7］